

細胞研究で病気に迫る

岐阜市で「体内作用を解明へ」
研究会講演

森京大教授が「小胞体」解説



細胞内小器官の一つ、小胞体の研究者が最新の研究成果を報告する「第11回小胞体ストレス研究会」が10、11の両日、岐阜市吉野町の岐阜大サテライトキャンパスで開かれ、森和俊京都大教授(58)が特別講演した。

(生駒美江)

研究会は全国の医学、生理学の研究者らで組織。今年は岐阜薬科大薬効解析学研究室が主催し、約50人が参加した。

森教授は1985年4月から4年間、岐阜薬科大薬学科薬劑学研究室で助手を務めた。本年度からは同大客員

教授。「小胞体の機能と制御のダイナミクス」と題し、立体構造の異常なタンパク質が小胞体内に蓄積した状態を修正する「小胞体ストレス応答」を詳細に解説した。

生体内では状況に応じて異なる種類のタンパク質が構造異常となりその修正に最も適した対応がなされる仕組みと、毒性を持つほど異常になったタンパク質は強制的に分解・排除する仕組みを示した。「病気の関連性を明らかにするために小胞体ストレス応答が体内でどう作用しているのか解明を進める」と強調した。

小胞体ストレス応答について最新の研究成果を解説する森和俊教授＝岐阜市吉野町、岐阜大サテライトキャンパス